

お取り越しの報恩講を振り返って

如来(にょらい)の作願(さがん)をたづぬれば

苦悩(くのう)の有情(うじょう)をすてずして

回向(えこう)を首(しゅ)としたまひて

大悲心(だいひしん)をば成就(じょうじゅ)せり

(Ref「正像末和讃(しょうぞうまつわさん)第三十八番」註釈版 P606)

一、末寺のお取り越しの報恩講を振り返って

毎年十月初めから十一月にかけて秋の深まりと共に末寺の報恩講の季節となります。私達住職は互いに内陣出勤の法中として参勤します。

またとない機会ですので、私も可能な限りお勤めの後のご法座のご縁に遇わせて戴きます。今年も幾つものご法縁に遇わせて戴きました。

印象に残ったのは、当院にお招きした松林尚真師の音楽演奏法話と南小松の徳浄寺様が遠路はるばる熊本からお招きになった元布教研究専従職員の葦原理江(江水)布教使のご法話でありました。

松林さんも小さなお寺のご住職の傍ら小学校の先生を続けていらっしゃいます。音楽が好きでたまらないところから、ご法話ではキーボードで演奏をなさいます。今年も金子みずぶさんの詩に付された曲をいくつも演奏して戴きました。なかでも「私と小鳥と鈴と」の演奏はすばらしく、後日ご無理を申して楽譜をお送り戴いたほどです。

葦原さんは、昨年九月十三日に滋賀組総代研修で正覚寺にご出講戴

いて以来一年ぶりでありましたが彼女のはつらつとした姿は一層際立っていると感じられました。お土産に九州龍谷短大の報恩講のお話を収録した「いのち第二七号」を頂戴しました。その中で彼女の録音起こしのご法話「今、ここにいきるといふこと」と題した一文にお目に掛りました。

おひとりの恩師とのお思い出の一端を紹介しながら、てらうことなくはじることなく、まこと伸びやかなそれは見事な一文でした。

思いがけなくも急逝された先生との思い出をつづりつつ阿弥陀様のお心を聞かせて戴いたとおっしゃった後には、ある先生から聞かせて戴いたとする次の詩が掲げられてあったことでもあります。

「人は去っても その人の言葉は残る

人は去っても その人の優しさは残る

人は去っても その人の温もりは残る

合わせる手の中に その人は還ってくる」と

私たちは人生で、悲しいこと、つらいこと、寂しいことと無縁ではありませぬ。葦原さんは、そんなときお念仏を称えとおっしゃいます。もちろんうれしいときも、そして阿弥陀如来のお心を思うとき、いつも思い出す詩があります、とってご紹介になった詩は、金子みずぶさんの「さびしいとき」という詩だったのです。

「私がさびしいときに よその人は知らないの

私がさびしいときに お友だちは笑ふの

私がさびしいときに お母さんはやさしいの

私がさびしいときに 佛さまはさびしいの」

この詩には、決してあらわには「仏様が私をお救い下さいます」とは書かれていないのに、私と共にさびしがって下さる方がいらっしゃる事が、私の悲しみをすべてわかって下さる方がいらっしゃる事が、私の救いであることが見事に謳いあげられているではありませんか。

二、如来様との双方向のコミュニケーション

私たちは、ただいま人間世界に生を頂戴しています。そこは言葉で生きる世界であります。人間同士の意思疎通の手段として言葉を使い、生活の中で、ビジネスで言葉を使います。そんな中でいつの間にやら言葉の持つ本来の意味を見失ってしまい、うわべばかりのコミュニケーションに流れる仕方で言葉を操作しているのではないかとさえ思われます。

私たちは、言葉の原点にたち還らなくてはなりません。浄土真宗にとって大切な「お聴聞」は、阿弥陀如来様との双方向のコミュニケーションであると言えるかと思えます。

浄土真宗は、言葉の宗教であります。それ故、言葉で以て阿弥陀如来のお慈悲を正確にお伝えすることが僧侶にとっての責務になります。「親鸞聖人のみ教えを正確に頂戴した上で、そのお心を正確にお伝えすることができなくてはならない。それが僧侶としての務めだ」とは、日頃、梯 實圓和上からお聞かせに与るお言葉でありました。

では、言葉で生きる人間世界の凡夫に対して、阿弥陀如来はどのようなお手立てをご本願としてお建てになったでございましょうや。法蔵菩薩は、苦悩の有情を救うために、五劫の永きに亘って思惟なされ、案じ出されたものこそは「南無阿弥陀仏」のお名号でありました。お名号とは何か、名とは法蔵因位のお名前であり、号とはご本願叶って

リビングライブズー平成二十一年十二月第二号「報恩講を振り返って」

阿弥陀如来となられた果位のお名前であると称します。

阿弥陀如来は、そのお名号によって私に迫って下さるのであります。その仕方を問えば、如来様はお喚び声になって迫って下さるのです。一寸先も定かではない今生の暗闇の中で如来様は大声で呼び続けて居て下さる(これを古語で「ヨバフ」と申します)のであります。

それ故、私が称え私の声を通して聞こえて下さる南無阿弥陀仏は、実はそのまま、如来様のお喚び声だったので。

そのお心は「ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」との仰せであります。

その仰せに対して、「なるほどさようでございましたか」と、頭が垂れるその瞬間、私は、如来様の一人児として誕生するのであります。

信心を頂戴した瞬間であります。

それからというもの、この私は、今生の命尽きるその日まで、称えれば聞こえて下さる阿弥陀如来のお喚び声に喚び覚まされつつ、おぼつかないながらも貪瞋^{とんしんにが}二河の白道をお導きにとり、お育てに与って参るのであります。思えば嘗て、一蓮院秀存師はお歌いになったことでありました。

「声しあらば あやうからじな 火に水の

なかのほそみち みゆもみえずも」と。

そしてとうとうこの世の命尽きるその瞬間、本当の仏様として如来様のお浄土へ誕生させて戴くことでもあります。合掌

正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp

平成二十一年十一月八日初版発行、二十一年十一月八日 零訂版 2